

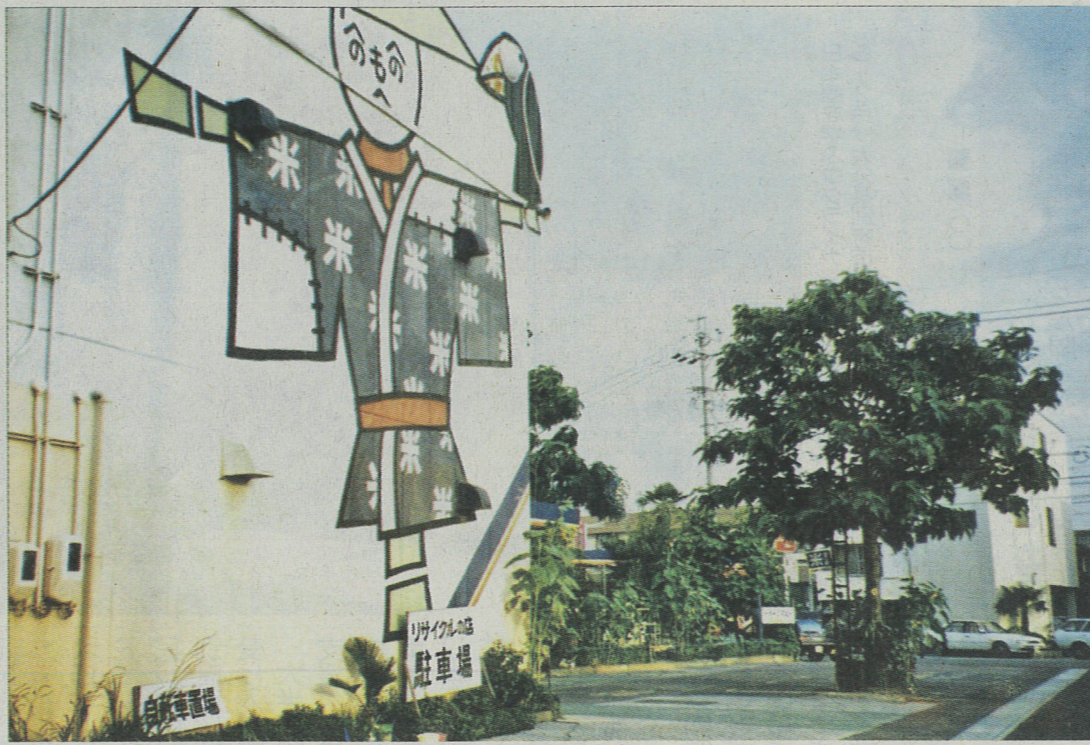
ライスアイランド 米店から雑穀店へ転換

雑穀商品企画販売のライスアイランド(本社岐阜市香取町3の38、小塩陽亮社長、電話058・216・5611)は1903年に米店として創業した。95年には食糧管理法の廃止で、米店の事業者数は10分の1に縮小。同社は穀物管理のノウハウを生かし、玄米やオートミールなど全粒穀物市場に参入した。「素食生活」シリーズを全国販売し、昨今の健康食人気の一翼を担っている。

(野田哲示)

ライスアイランドは米店「米清」として創業。1983年に法人化し、88年にライスアイランドに商号変更した。

現社長の祖父で、2代目社長との與清雄氏はアイデアマンだった。米をスーパーではなく、米店で購入することが当たり前だった。



米店としては珍しいドライブスルーを導入した(写真は本体外観)

変幻自在

老舗企業の挑戦

穀物管理のノウハウ生かす

玄米やオートミールで健康食ブームをけん引



小塩陽亮社長

2000年代からは、健康食意欲を燃やしている。

22年5月から、4代目社長として小塩陽亮氏が就任。現在の企業理念は、全粒穀物の食文化を日本に定着させることだ。

小塩社長は「オートミールは参入企業が多く、(なかには)粗悪品も流通しており、『まずネット草創期で、パソコンの普及率は低かった。思うような利益は出なかったが、珍しい取り組みとして、ライスアイランドの名が全国に広がった。』というイメージが定着しつつある」と話す。一方で、「オートミールをはじめ、全粒穀物は五穀豊穡として米に並び、長年食べられてきた歴史がある。本当のおいしさを伝えたい」と

2000年代からは、健康食意欲を燃やしている。

22年5月から、4代目社長として小塩陽亮氏が就任。現在の企業理念は、全粒穀物の食文化を日本に定着させることだ。

小塩社長は「オートミールは参入企業が多く、(なかには)粗悪品も流通しており、『まずネット草創期で、パソコンの普及率は低かった。思うような利益は出なかったが、珍しい取り組みとして、ライスアイランドの名が全国に広がった。』というイメージが定着しつつある」と話す。一方で、「オートミールをはじめ、全粒穀物は五穀豊穡として米に並び、長年食べられてきた歴史がある。本当のおいしさを伝えたい」と

2000年代からは、健康食意欲を燃やしている。

22年5月から、4代目社長として小塩陽亮氏が就任。現在の企業理念は、全粒穀物の食文化を日本に定着させることだ。

小塩社長は「オートミールは参入企業が多く、(なかには)粗悪品も流通しており、『まずネット草創期で、パソコンの普及率は低かった。思うような利益は出なかったが、珍しい取り組みとして、ライスアイランドの名が全国に広がった。』というイメージが定着しつつある」と話す。一方で、「オートミールをはじめ、全粒穀物は五穀豊穡として米に並び、長年食べられてきた歴史がある。本当のおいしさを伝えたい」と



2000年代からは雑穀など健康食に注目(写真は素食生活シリーズ)

愛知万博開催

2005年に愛・地球博(愛知万博)が開催された。これに先立ち中部国際空港(セントレア)が開港し、また市営地下鉄の名城線が環状線となり、中部と世界、そして名古屋市内のアクセスが格段に向上した。

セントレアは万博に約1カ月先立つ2月17日に開港した。雪を心配したが、幸い関係者一同の心持ちの良さを天がみそなわしたのか、開港日は晴天に恵まれた。「トヨタ空港」といわれるほど、民の英知やノウハウが反映された空港で、その点でも中部が世界に誇るべきものであった。

しかし万博関係者一同の心持ちがセントレア関係者同様よかったにもかかわらず、3月25日の愛知万博開幕日は雪であった。開幕式典に参加される海外や遠方からいらしたVIPは既に到着後であったとはいえ薄氷を踏む思い

前名港海運会長
元名古屋商工会議所会頭

高橋 治朗 43



2005年愛・地球博ベルギーナショナルデーで同国フィリップ国王(当時皇太子)と談笑

蓋を開ければ大盛況

開幕式典には博覧会協会会長の豊田章一郎さんも駆けつけて下さったが、時ならぬ降雪に震え上がり分厚い上着を着込むわれわれを尻目に章一郎さんは背広のみ。章一郎さんの気迫に改めて深く感服した。

寒さもあり、前半は期待した入場者数に届かなかったが、暖かくなるにつれ、客足はぐんぐん伸びていった。トヨタさんはもちろん、日本が世界に誇る企業から各国に至るまで、腕により

をかけたパビリオンが軒を連ねているのだから見ごたえ十分で面白くないはずがない。急回復は必然であった。

私の仕事は、大使館や領事館、船会社などに協力を仰ぎつつ、海外のお客さまを連れてくること。名古屋商工会議所副会頭かつ国際担当であり、さらにはロータリークラブで98年に西ロータリークラブ会長を務めたのに続き、05年は当地区全体のガバナー(代表)も仰せつかった。自然海外要人の引率を引き受けることも多かった。ロータリー館の館長が幼なじみで

私の2代前のガバナーであった豊島徳三さんだったのも、うれしくまたやりがいがあった。

商工会議所が特に力を入れていたのは「ナショナルデー」の開催だ。これは万博参加121カ国のほぼ全てが参加した、それぞれの国のお祭り日だ。この日はその国の音楽や芝居を上演したり、名物料理を出したり、さらに王族、首相などホスト国のVIPが来日するため、ニュースで取り上げられやすい。イベントにだけ力を入れても、しっかりと分散させないとパリュウが下がる。この手法は非常にうまくいき、後半はさらに盛り上がった。

旧知だったベルギーのフィリップ国王陛下(当時皇太子)やサウジアラビア王族との交流は特に思い出深い。結局愛知万博は、目標を大きく上回る約2200万人の方に「ご来場いただき、大盛況裏に閉幕したのだった。」